



健康と競技の心理

Psychology of Health & Sport

◇ News! 第 26 回大会のお知らせ	
九州スポーツ心理学会 第 26 回大会開催にあたって	1
「私は非大衆人でありたい！」	
第 26 回大会プログラム	2
◇ 特集 第 25 回を振り返って	
基調講演	5
「研究のオリジナリティを求めて—視点をどこに置くか—」	
特別企画	6
「フリースタイル・グループディスカッション」	
◇ 学会報告	
日本スポーツ心理学会報告	7
◇新連載 研究タマゴ	8
◇お知らせ	
ASPASP の日本開催に向けて	10
九州スポーツ心理学会からのお知らせ	11
九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ	12
編集後記	13

九州スポーツ心理学会 第 26 回大会開催にあたって

私は非大衆人でありたい！

九州スポーツ心理学会理事長 山口幸生

研究する事、学問する事の目的は何であろう。今更何を、と思われるかもしれない。社会に役立つため？それも大事だ。でもそのためだけだろうか？ここは格好良く「真理の追究」であると言っておきたい。ならば研究者の集まりである学会の目的は、国際学会であれ地方学会であれ、真理の追究のため議論することにつきる。

どんな場合でも活動の目的に沿った評価が極めて重要になる。学会の場合は、研究発表、シンポジウム企画やその場で交わされた議論が、「真理の追究」にどれだけ貢献できたか、が基準となろう。もちろん議論の結果だけではなく、その議論の質や方向が生産的であったかも大切である。

ただ議論すれば良いかという、そうでもない。時々、話題提供者や発表者が、どんな反論・指摘にあっても自説を曲げずに、最後まで自説を弁護し続ける事がある。こうなると議論は全くかみ合わない。田原総一郎氏が司会を務める有名な「朝まで生テレビ」でよく見られるやりとりである。小松ら（2009）は、オルテガの「大衆の反逆」を参照して、大衆人と非大衆人を分類する尺度を開発した。ここで言う大衆人とは「自分自身凡庸である事を自覚しつつ、凡庸たることの権利を主張し、自分より高い次元からの示唆に耳を貸すことを拒否している人」を指す。非大衆人とは、その反対の心理的性質を持ち、オープンで自分の限界を知っている人である。先の研究では、尺度を用いて大学生を 2 種類（大衆人／非大衆人）に分類し、特定テーマの議論内容を質的に分析している。結果、非大衆人同士では議論が生産的になり、自説が変化していくのに対し、大衆人同士の議論および大衆－非大衆人の議論では、生産的議論が起こりにくく、自説に変化がない、という非常に興味深い報告をしている。

最近、関西の某市長がいじめや体罰問題に絡んで、学者は黙っている！と強烈な学者批判をツイッター上で繰り返している。主な主張は、あなた方は政治をやったことがあるのか？組織を率いたこともない人間が勝手なことを言うな！というものである。そこでは、ターゲットになった学者の主張は無視され、かみ合った議論は展開されない。単に勝者になるためだけに、論点とは異なる下品な主張が粘着ぎみに繰り返される。本人は政治をやっているつもりなのであろう。しかし、このようなアプローチで、真の改革が進むとは到底思えない。その意味では、政治も学問の世界も同じである。最初に主張した自説を変えてでも、きめ細かな、徹底した議論を通してしか、真理の追究は行えない。少なくとも私は非大衆人でありたい。

【参考文献】

- 1) 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡, 個人の大量性と弁証法的議論の失敗に関する実証的研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, vol. 39, 2009.

九州スポーツ心理学会 第 26 回大会開催

大会テーマ「卓越性の日常化」

平成 25 年 3 月 9 日・10 日 福岡大学中央図書館多目的ホール・商学部棟

日時 1 日目：平成 25 年 3 月 9 日（土） 受付 12：00～

2 日目：平成 25 年 3 月 10 日（日） 受付 8：30～

会場 福岡大学 中央図書館多目的ホール・商学部棟

福岡市城南区七隈 8 丁目 19 文 1 号

参加費 会員 ¥3,000 当日会員及び学生会員 ¥2,000

【3 月 9 日（土）】

11：00～12：00 理事会（商学部等 2F）

12：00～13：00 受付（中央図書館エントランス）

13：00～13：05 会長挨拶（多目的ホール） 橋本公雄（熊本学園大学）

13：05～14：15 基調講演（多目的ホール）

テーマ：「ライフ・ワーク（研究スタイル）としての行動療法
—お掃除から子育てまで—」

講師：足達淑子（あだち健康行動学研究所所長）

司会：山口幸生（福岡大学）

14：30～17：00 特別企画 フリースタイル・グループディスカッション

14:30～14:50 全体ガイダンス（多目的ホール）

14:50～15:40 1st セッション（商学部棟 2 階各会場）

15:40～16:30 2nd セッション（商学部棟 2 階各会場）

17:05～17:35 全体ディスカッション（多目的ホール）

テーマ&モデレーター：

- ① 卓越したフォロワーシップ 杉山佳生（九州大学）
- ② スポーツ心理学者の就職・キャリアアップを考える 山津幸司（佐賀大学）
- ③ 経験や勘を大事にする運動制御・学習研究を考える 中本浩揮（鹿屋体育大学）
- ④ 体罰問題の何が問題か？そしてスポーツ心理学者がすべきこと
山口幸生（福岡大学）

総合司会：磯貝浩久（九州工業大学）

17：05～17：40 総会（多目的ホール）

18：00～19：30 情報交換会（学内文系センター スカイラウンジ）

【3月10日（日）】

7:00～8:30 硬式テニスコート解放

8:30～9:00 受付（中央図書館エントランス）

9:00～10:20 学生企画（多目的ホール）

テーマ：個人競技のチーム意識は $1 + 1 = 2$ の意識を変えるのか？

～現象・理論・実際の調査から検討～

演者：副島加奈子（福岡大学大学院）

大石彩加（九州大学大学院）

萩原吾一（九州工業大学大学院）

司会：畝中智志（鹿屋体育大学大学院）

10:30～12:00 シンポジウム（多目的ホール）

テーマ：ロンドン 2012 パラリンピック競技大会における心理サポート

話題提供者：内田若希（九州大学）

橋口泰一（日本大学）

司会：秦泉寺尚（宮崎大学）

企画：兄井 彰（福岡教育大学）

12:00～13:00 昼休み（ポスター掲示）

13:00～14:30 ポスター発表（多目的ホール）

特集

特集 第 25 回を振り返って

九州スポーツ心理学会第 25 回大会が下記において開催されました。

日 時 平成 24 年 3 月 10 日(土)・11 日(日)
会 場 九州大学筑紫キャンパス C-CUBE(総合研究棟)
福岡県春日市春日公園 6-1

大会テーマ：

『スポーツ心理学の将来を展望する』

基調講演 「研究のオリジナリティを求めて—視点をどこに置くか—」

特別企画 フリースタイル・グループディスカッション

研究方法論の探求

地域住民の身体活動量を促進する戦略を考える

学校体育に資する運動・スポーツ心理学—現場への適用と実践—

理論に則ったメンタルトレーニングの方法開発

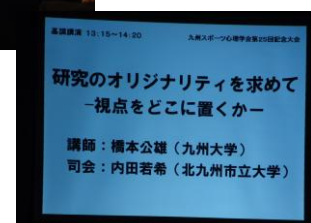
トップアスリートが求める心理的サポートの実際

日本人的なスポーツ行動を考える

学生企画 「ソーシャル・サポートの有効性とは？」

シンポジウム 「職業としてのスポーツメンタルトレーニング指導」

ポスター発表



基調講演

「研究のオリジナリティを求めて

—視点をどこに置くか—」

講師：橋本公雄（九州大学） 司会：内田若希（北九州市立大学）

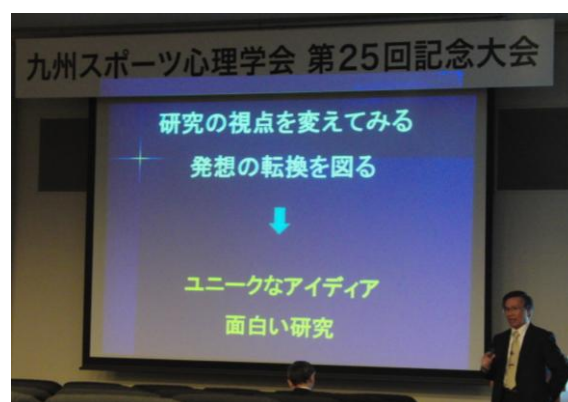
* 上記所属は学会当時の所属となっています。

内田若希（九州大学）

昨年度の九州スポーツ心理学会は、学会発足 25 周年の記念の年でした。時を同じくして、九州大学健康科学センターに 25 年お勤めになられた橋本公雄先生（現・熊本学園大学教授）が、ご退職の年を迎えました。この 2 つのメモリアルが重なった基調講演において、僭越ながら司会を担当させていただきました。

さて、徳永幹生先生（現・福岡医療福祉大学教授）が九大ご在職の頃、当時院生だった私たちの間では「徳永先生は王監督、橋本先生は長島監督」とささやかれていました（勝手にすみません...）。長島監督は感性やインスピレーションの天才肌だと言われていますが、橋本先生もまさにインスピレーションに富み、多くのオリジナリティにあふれた研究を生み出してこられました。つついり理詰めで考えすぎて煮詰まってしまうがちな私は、この橋本先生のインスピレーションに何度助けられたか分かりません。

天才肌と言っても、長島監督も現役時代に人知れず努力を積み重ねてきたことが知られているように、橋本先生のインスピレーションも、日々の努力の積み重ねの中で磨かれていたのだと今回の基調講演をお聞きして実感しました。基調講演の中で取り上げられていた「快適自己ペース」や「運動継続化の螺旋モデル」の発端は、公園で走るジョガーから着想を得られていますし、「スポーツドラマチック体験」も実際のアスリートの体験からヒントを得ておられます。橋本先生のオリジナリティに富んだ研究の源は、日常生活の中でそこに生きている「人」に目を向け続けることを怠らなかつたことにあるのではないのでしょうか。論文を読んだり、分析を行ったりすることも、もちろん研究には必要なことですが、幅広い視野に立ち、「人」の行動をみつめる視点を忘れないことが、きらりとひらめくオリジナリティを発見することにつながっていくのだと再認識する機会となりました。



特別企画

「フリースタイル・グループディスカッション」

モデレーター：島本好平（兵庫教育大学）山口幸生（福岡大学）藤原大樹（保健医療経営大学）

兄井 彰（福岡教育大学）今村律子（福岡大学）磯貝浩久（九州工業大学）総合司会：杉山佳生（九州大学）

*上記所属は学会当時の所属となっています。

今村律子（九州工業大学大学院）

本年度は特別企画として、本学会では初となる「フリースタイルディスカッション」が行われました。

総合司会の杉山先生の進行で、「研究方法論の探求」島本好平先生（兵庫教育大学）、「地域住民の身体活動量を促進する戦略を考える」山口幸生先生（福岡大学）、「学校体育に資する運動・スポーツ心理学—現場への適用と実践—」藤原大樹先生（保健医療経営大学）、「理論に則ったメンタルトレーニングの方法開発」兄井 彰先生（福岡教育大学）、「トップアスリートが求める心理的サポートの実際」今村律子（福岡大学）、「日本人的なスポーツ行動を考える」磯貝浩久先生（九州工業大学）と会場ごとに6つのテーマが紹介されました。時間は2セッションに区切られ、自分の興味のある2テーマの会場に足を運び、それぞれのデモレーターのスタイルのもと、ディスカッションが行われました。参加者からは、どの会場に行くか非常に迷ったとの声が出ておりました。私自身もデモレーターでなければ、「聞きたい！話したい！」と思うようなテーマがそろっていました。（少し悔しかったですね）

さて、私がデモレーターとして担当していました「トップアスリートが求める心理的サポートの実際」の会場でも、2回のディスカッションで内容にも変化があり、私の方が非常に刺激を受けた気がします。先生方のご経験と、つい最近まで現役選手だった学生さんとの会話に、トップアスリートは何を求めているのか！という激論がなされました。今回の企画をとおして、学生から先生方まで非常に近い距離の中で行われた内容は、他の学会ではなかなか見られない光景でもありました。

その後、全体ディスカッションでの内容から、各会場で活発なディスカッションが行われたことが感じられました。どの会場もまだまだ時間が足りなかったと聞きました。一方的に流れるのではなく、人と人が向き合い語られる温度が実感しあえる「熱い！」時間でした。

学会参加報告

「日本スポーツ心理学会報告」

参加学会：平成 24 年 日本スポーツ心理学会第 39 回大会

日時・開催地：11 月 24, 25 日・金沢星陵大学

副島加奈子（福岡大学大学院）

11 月 24 日, 25 日に開催された日本スポーツ心理学会に参加しました。大学院に進学し、初めての学会への参加で、何もかもが学びとなるものでした。多くの先生方や大学院生の研究をみて、スポーツ心理学という大枠から様々な研究の視点や切り口があること、そしてスポーツ心理学への興味がさらに湧くと共に今後の研究の進めに刺激を受けました。

今回の大会の特別講演では「オリンピックとスポーツ心理学」の題目で陸上競技やり投げ選手である村上幸史選手の講演を聴きました。現場のトップアスリート選手の話を知ることができ、貴重な時間を過ごすことができました。村上選手は『感覚』を何よりも重要としているそうです。トレーニング中や試合、さらに日常生活においてもピークパフォーマンス時における槍を持った感覚、フィールドが実際より近く見える感覚、投げた瞬間の感覚...やり投げに関わる『感覚』を思い立てばイメージしているそうです。スポーツオタクという言葉が私の頭をよぎりました。しかし、この『感覚』を大事にすること、生活の一部にすることは何ら私たちも変わらないことなのかなとも思いました。自分の...自分の...と村上選手は何度もおっしゃっていました。心の状態を知ること、身体の状態を知ること、つまり自分自身を知ることが力の発揮の第一歩であると思います。

今回の日本スポーツ心理学会への参加は発表の仕方から研究の内容まですべてが学びの一つとなりました。今後、今回の学会で学んだことから研究を進め、来年度の日本スポーツ心理学会では私が発表者としてあの場に立てるよう精進していこうと思います。

新連載

新たなステージを求め、研究の第 1 歩を踏み出した方々をご紹介します。

「研究タマゴ」

福岡県地域産業保健センター福岡東支部・保健師（現在職）

→ 福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科博士課程前期

松田陽二（福岡大学大学院）

私は保健師として、4 年間現場で特定保健指導に携わる仕事をしていました。現場で指導をしていく中で、自身の保健指導能力に疑問を持つようになり、保健指導技術を向上させ、保健指導を受けた人が納得のいく指導者になりたいと思うようになりました。保健指導技術を向上させるためにいろいろな研修会や講習会に参加しましたが、自身の保健指導技術が向上している実感がなく、保健指導技術を向上させるためにはどうしたらよいかを研究したいと思い、大学院で研究することを決心しました。

大学院へは、社会人入学試験で入学し、現場を離れたくないという思いと経済的な面から長期履修制度を活用しました。社会人入学試験での大学院入学というのは、聞こえは良いですが、「今の環境でも十分勉強できるのに、なんで学生に戻る必要があるのか」というような一部で厳しい意見もありました。自分自身で決めたことで、前に進むしかないという思いと、職場の上司や同僚の後押しもあり、1 年目は長崎県から福岡県まで仕事の合間をぬって片道約 2 時間かけて車や公共機関で通学しました。2 年目からは福岡へ移住し、仕事も以前よりも負担が少ないものへ転職しました。大学院へ通学できる時間が増え、研究も徐々に前へ進むことができるようになり、ようやく研究者への第一歩を踏み出すことができました。それも叱咤激励の指導をしてくれる先生方、研究室の仲間を支えられここまで頑張ることができたと思います。

「研究タマゴ」

アーカンソー州立大学大学院 スポーツ経営学専攻（修了）

→ 九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻博士後期課程

萩原悟一（九州工業大学大学院）

私が九州工業大学大学院に入学したきっかけは「人」でした。九州共立大学の仲里先生にお会いするため九州を訪れていた際、現在の指導教官である九州工業大学の磯貝先生とお会いする機会をいただきました。お二人の先生方のお人柄や魅力に引かれ、「ここで学んでみたい」と強く思ってから、数週間、大学院入学の4ヶ月以上前から現地入りしたにも関わらず、研究室の一員として受け入れて下さりました。まさに、多くの人たちの関わりやご支援の中で、私の研究生活がスタートいたしました。

大学院で研究をしていく中で感じたことは、研究者が研究によって明らかにしたことが、多くの現場で活かされているということを実感しました。大学院では幸いなことに身近にすばらしい研究者の方々がいますので、そのような方々の行動、考え方をお手本にまずは研究者の卵になれるよう切磋琢磨していきたいと思えます。

米国の大学院ではスポーツマネジメント分野を専攻しておりました。スポーツマネジメントとは1980年代前半に北米で始まった、スポーツ組織に関わるマネジメント全般を網羅した領域です。その中で、特に私が研究領域として注目しているのが、「人と人」をつなぐ、人材マネジメントです。米国の大学院在学中、NCAA1部に所属する男子バスケットボール部のマネージャーをしておりました。最初はチームに唯一のアジア人ということもあり、選手との距離を感じておりました。ところが、ある日、ヘッドコーチが練習を中断し、気の抜けたプレーをしていた選手たちに対し、「GO（私のあだ名）の姿をみろ、異国にきて君たちの為にこれだけ一生懸命に働いてくれる最高のマネージャーがいるんだぞ！誇りに思え！」と叫びました。突然のことで、私自身も動揺いたしましたが、それ以降、選手たちとの距離も縮まっていき、最後は地区優勝したことを今では懐かしく思います。

スポーツ組織において、監督やコーチ、またはゼネラルマネージャーのチームマネジメント能力が組織の成功のために重要となっています。所属する成員のモチベーションを把握することはマネジメントする者にとって重要であるとされていることから、スポーツ心理学分野である「動機づけ理論」に注目をして、スポーツ組織マネジメントの研究を進めております。



お知らせ
「ASPASP の日本開催に向けて」

開催学会名 : Asian South Pacific Association of Sport Psychology
アジア南太平洋スポーツ心理学会

磯貝浩久 (九州工業大学)

ASPASP (アジア南太平洋スポーツ心理学会) の日本開催が、2011 年に台湾で開催された第 6 回大会で正式に決まりました。誘致活動は日本スポーツ心理学会の国際交流委員会を中心に行ってきましたが、開催決定を受けて ASPASP 準備委員会を立ち上げ、本格的に準備を進めています。そこで今回は、第 7 回 ASPASP 大会がいつどこで開催され、参加や発表はいつ頃から申込めるのかといった日程についてお知らせしたいと思います。

開催期間 : 2014 年 8 月 7 日-10 日

開催場所 : 国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区代々木神園町 3-1 <http://nyc.niye.go.jp/>)

大会までの主な日程

- 2013 年 3 月 : 発表形式などの大会概要についてお知らせ
- 2013 年 9 月 : キーノートスピーカーについてお知らせ
- 2013 年 11 月 : 参加申込・発表受付開始
- 2014 年 2 月 : 発表申込締切
- 2014 年 6 月 : プログラム公表

これらの案内は、ASPASP 大会 HP : http://www.aspasp2014.jp/index_jp.htmlで行いますのでご確認ください。

第 7 回 ASPASP 大会は、日本スポーツ心理学会大会とジョイント開催になっています。九州からも多くの人たちが参加し、アジアの研究者との交流が深まることを期待しています。

学会からのお知らせ

《 九州スポーツ心理学会の紹介 》

沿 革

本学会は、第 1 回が昭和 63 年 3 月に開催され、九州スポーツ心理学研究会として発足しました。第 6 回大会（平成 5 年）より九州スポーツ心理学会と改称し、学会としての組織化が行われています。

目 的

本学会は、運動・スポーツ心理学における研究と介入を促進することを目的としています。事業として、運動・スポーツに関する心理学的研究とその応用に関心ある人々のために年 1 回の学会大会を開催し、情報交換および交流の場を提供しています。

会員のメリット

1. 健康・スポーツ心理学に関するさまざまな情報が得られます。
2. 年 1 回の学会大会の案内が送付されます。
3. 「九州スポーツ心理学研究」が送付されます。
4. 健康運動指導士の公衆ポイントが得られます。
5. 日本スポーツ心理学会「資格認定スポーツメンタルトレーニング指導士」の研修ポイントが得られます。

《 学会入会希望の方へ 》

入会をご希望の方は下記の項目を記入の上、事務局まで郵送または E-mail にてご連絡ください。

1. 氏 名
2. 所属機関
3. 連絡先（勤務先・自宅）
4. 電話番号（勤務先・自宅）
5. FAX 番号（勤務先・自宅）
6. E-mail

連絡先 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8 丁目 19 番 1 号

福岡大学スポーツ科学部内

九州スポーツ心理学会事務局 宛

TEL : (092) 871-6631 (内 6728)

FAX : (092) 865-6029

E-mail : kssp@fukuoka-u.ac.jp

九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ

役員（平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月）

会長	橋本 公雄	熊本学園大学
副会長	磯貝 浩久	九州工業大学
理事長	山口 幸生	福岡大学
顧問（前会長）：	徳永 幹雄	福岡医療福祉大学
	佐久本 稔	福岡女子大学名誉教授
	山本 勝昭	福岡大学
理事：	兄井 彰	福岡教育大学
	岩崎 健一	熊本健康・体力づくりセンター
	井上 勝子	熊本学園大学
	秦泉寺 尚	宮崎大学
	山内 正毅	長崎大学
	森 司朗	鹿屋体育大学
	伊藤 友記	九州共立大学
	宮城 政也	琉球大学
	山津 幸司	佐賀大学
	杉山 佳生	九州大学
広報担当理事	今村 律子	福岡大学非常勤
会計担当理事	坂元 瑞貴	福岡大学
監事	下園 博信	九州共立大学

事務局スタッフ（平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月）

総括	山口 幸生
会計	坂元 瑞貴
編集	難波 秀行

各種委員会委員（平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月）

企画委員会	橋本公雄 岩崎健一 磯貝浩久 山口幸生 兄井彰 杉山佳生
広報委員会	今村律子 徳島了（HP 担当：福岡大学）清水安夫

学生企画スタッフ（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）

畝中智志	水崎佑毅（鹿屋体育大学大学院）
大田さくら	副島加奈子（福岡大学大学院）
大石彩加	（九州大学大学院） 萩原悟一（九州工業大学大学院）

あとがき

九州スポーツ心理学会会報「健康と競技の心理 (Psychology of Health & Sport)」第 17 号をお届けいたします。

寒い日がまだまだ続く中、我が九州スポーツ心理学会は「温かい」ものがあります。今回、新連載として「研究タマゴ」というタイトルで、研究の道の第一歩を踏み出した方々をご紹介しますことにしました。厳しくも温かな目で見守って下さる先生方の元から羽ばたいていく期待の星です！まずは、新連載にあたり、お二人に研究への意気込みを綴ってもらいました。現在もお仕事をつづけながら研究をする松田さんと、アメリカの大学院で学んだことをさらに深めたいとスポーツ心理学の世界に飛び込んできた萩原さん。お二人の今後の活躍が刺激となり、次々にここから生まれるタマゴさんたちをご紹介しますと考えると考えております。タマゴさんの「輪」が「和」になり、我々が学会を熱く盛り上げて行くことになると願っています。(そういう私もまだまだひよっこではありますが…) ここ、九州で私は先生方の「和」を見て育ってきたような気がします…。

そんな我々が九州スポーツ心理学会は 26 回を迎えます。次号は、その熱い「こころ」をできる限り早くお届けできればと思います。最後になりましたが、お忙しい中、快く本ニュースレターの御執筆を頂きました先生方および大学院生の皆様、誠にありがとうございました。皆様方に厚く御礼、申し上げますとともに、今後ともよろしく願い申し上げます。そして 26 回大会では、たくさんの方々に参加していただけることを願っております。

編集担当 今村律子



平成 25 年 2 月 発行
九州スポーツ心理学会会報第 17 号
「健康と競技の心理」
Psychology of Health & Sport
広報・編集担当
今村律子 徳島了

*当記載すべての無断転載・引用等は固くお断りします